

メールアドレス tadashi6414@smile.ocn.ne.jp

H P <http://yama-to-hana-no-tayori.sakuraweb.com/>

冠雪の縦走路から赤坂山 (824m)へ

11月下旬は不安定な天候が続いた。その中で秋晴れの11月29日(月)、高齢者3人で滋賀県赤坂山に出かけた。

観光客いっぱいのメタセコイア並木

近鉄とJR湖西線を乗り継いで、9時26分マキノ駅下車。タクシーで登山口に向かうが、途中メタセコイアの並木で停車してもらって見物。

今や観光名所となった並木道には車がたくさん停車し、カメラを持った人々でいっぱい。

右の写真は同乗のKさんが車内から写したもので、見事な黄葉の一端が窺える。



林道歩き一時間

タクシーは黒河(くろこ)峠に向かうが、途中で車止めがしてあり、10:00 林道を歩き始める。曲折しながら上っていく林道。沿道の紅葉、黄葉を楽しみながらゆっくり進む。イワカガミ、イワウチワ(トクワカソウ)などの葉が陽光を受けてテラテラと光っている。雪の白と枯葉色のひろがる中で、マムシグサの朱い実が目を引き。10:55 黒河峠のトイレに到着。トイレを使わせてもらうが汚い。

次第に深さ増す積雪

トイレの向いから登山道に入る。すぐに林道に出て、また登山道に。やがて雪を踏んで歩くようになり、道の傾斜もきつくなる。Sさんが持参のアイゼンを装着。くさり場を過ぎ、

↑マムシグサの実 斜面をジグザグに登っていく。雪の深さが増していくが、歩行を妨げるほどではなく、むしろ足にやさしい感じだ。

雪の中にたくさんのイワウチワの葉

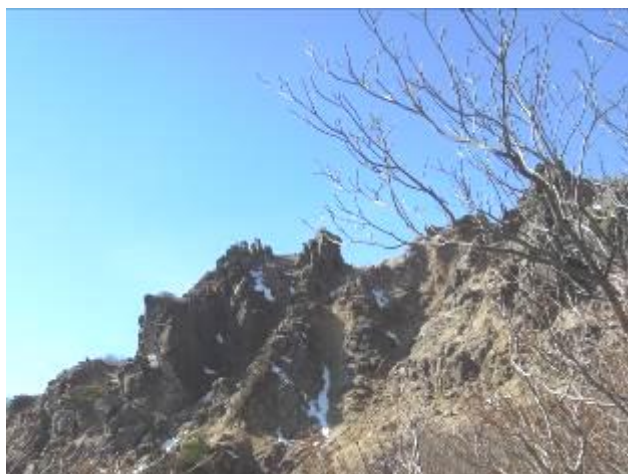
まもなく湿原に。木道を慎重に歩き、雪の中の清流を渡って12:10

↓明王の禿 三国山分岐に。雪の上にシートを敷いて昼食を摂る。

よく見ると雪の斜面にイワウチワ(トクワカソウ)の葉が無数に出ている。春にはこの一帯の林床がイワウチワの花で覆われるのだ。

琵琶湖そして岩峰

同行のお二人からデザートのお菓子をいただき、リンゴを丸かじりして12:40歩き再開、イワウチワの多さに感嘆しつつ歩く。突然開けた場所に出た。崖の上に出たのだ。左に琵琶湖が大きい



く広がり、右を仰ぐと荒々しい岩峰の塊が紺碧の空に突き立っている。明王の禿(みょうおうのはげ)と呼ばれる花崗岩の露出地だ。水晶の産地でもあったらしい。

赤坂山山頂—眼下に琵琶湖、その向こうに伊吹山

13:05 明王の禿でアイゼンをはずし、小休憩後、南に見える赤坂山目指して歩き出す。ここらも春にはカタクリなどが咲く所だ。13:35 赤坂山山頂到着。

眼下に陽光を浴びた琵琶湖が鈍色(にびいろ)に光り、その向こうに雪をかぶった伊吹山が大きく迫っている。

白山も、日本海も

東から北へと目を転じれば、湖北の山々の連なりの向こうに加賀白山が純白の姿を輝かせており、一方若狭湾が見え、そこから日本海が果てしなく広がっている。強く吹く風に身を晒しながら、眺望を楽しむ。



栗柄越(あわがらごえ)は古くからの街道

赤坂山の南の鞍部には栗柄越と言われる旧街道が通っている。古くからの路で、若狭と近江を結ぶ最短の峠道だった。水上勉の小説「湖の琴」にはここを通過して賤ヶ岳麓に奉公に出た少女の半生が描かれている。その街道の名残か、道には石畳の箇所がある。

そしてオオイワカガミ群生の道

そしてこの道はオオイワカガミ群生の場所でもあるのだ。大きくて光沢のある葉は、この植物名の由来をも実感させてくれる。

15:00 ぶなの木平。あずまやで小休止し、15:30 マキノスキー場着。湖国バスでマキノ駅に。

←照り輝くオオイワカガミの葉



生きた化石＝メタセコイア

観光名所となったマキノ町(現高島市)のメタセコイアの並木道。特に葉が赤褐色に輝く秋には、多くの愛好家や観光客が訪れる。

命名されて80年の新しい種

このメタセコイアは、地球上に1億年前に出現し、その後(日本では100万年前)絶滅したと考えられていたが、1946年中国四川省で現存していることが分かり、そこから世界中に広がって、日本でも各地で栽培されている。

命名者は日本の学者

従来セコイアやヌマスギの仲間とされていたが、日本の三木茂博士が別種であることを証明。「のちの」「変わった」の意味の接頭語「メタ」を付けて「メタセコイア」と命名した。ちなみに和名は「アケボノスギ」。



トクワカソウとイワウチワ

赤坂山や日本海側のイワウチワは「トクワカソウ」とも呼ばれているが、両者の関係には諸説がある。